

# 再葬の背景

縄文・弥生時代における環境変動との関係

設楽博物館

A Background to Reburial: Correspondence to Environmental Changes in the Jomon and Yayoi Periods

- ①はじめに
- ②縄文中期末～後期前葉の再葬
- ③縄文晩期～弥生時代の再葬
- ④集落の消長と環境の変動
- ⑤再葬の背景
- ⑥まとめ

## 【縄文・弥生】

縄文中期終末から後期へ、縄文晩期から弥生時代の始まりへ、それらはいずれも列島規模で、文化や社会が大きく転換した時代であり、時期であった。その歴史の節目に、地域や時代を超えて再葬墓が営まれることは何を意味するのだろうか。再葬が発達した地域におけるそれぞれの転換点で共通するのは、集落の衰退すなわち人口の減少である。環境変動に目を向けると、その転換期に共通した要素として気候の寒冷化をあげることができる。まさしく、環境の悪化が再葬を誘発したといつても過言ではない。

歴史の中で再葬が出現する理由はさまざまであったろうが、死者を基軸に集落あるいは地域の結束を固めるための祖先祭祀として発生したことが、理由の一つにあげられる。自然環境によって小規模になり分散化した集落を統合する原点として再葬墓が機能したのであり、その象徴が再葬された祖先でありあるいは墓自体であった。

再葬が発達した縄文後期前葉の京葉地方は、気候の再温暖化によつて大貝塚を形成したように、再葬がすべて悪い環境のときを発達したばかりはいえない。自然環境の回復あるいは集落の発展を迎えるも、ひとたび制度として定着した再葬は、なおも集落結集の装置として機能したのである。

琉球・奄美諸島の洗骨葬は、祖先祭祀の意味があり、縄文・弥生時代の再葬を考える手がかりになる。そこで再葬は一種の通過儀礼として行われていた。縄文晩期～弥生時代前半は、拔歯をはじめとする儀礼を発達させた時期である。再葬制もこの時期に儀礼的要素を強めるのであり、祖先祭祀と通過儀礼の強化と言い換えることができる。それは厳しい自然環境に立ち向かうための生活技術であり、再葬の背景であった。